

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520723

研究課題名（和文） イベリア半島におけるブタ飼養と地域ブランドとしての「イベリコ豚」の形成過程

研究課題名（英文） The Iberian Pig: An Anthropological Approach to Pig-feeding Systems and the Process of Creating a New Local Brand in the Iberian Peninsula.

研究代表者 野林 厚志 (NOBAYASHI ATSUSHI)
国立民族学博物館・研究戦略センター・教授
研究者番号：10290925

研究成果の概要（和文）：

Dehesa(地中海性森林)のドングリを利用したイベリコ豚の飼養はイベリア半島で数百年にわたって伝統的に行われてきた。EU 成立後の国際経済戦略の一環として、地域社会で流通していたイベリコ豚製品を対外的に売り出すために、ブランド化を促す制度設計が行われた。これは、イベリコ豚飼養が個人から企業に委ねられていく結果を生み出した。一方で、エコツーリズムや地域博物館の設置がイベリコ豚の伝統飼養と関連づけられ、本来は日常的な家畜であったイベリコ豚が地域の文化資源として位置づけられていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

Local community in Iberian Peninsula has continued feed Iberian pig with the natural resources, especially acorn in *Dehesa* (Mediterranean woods) during centuries. After the establishment of EU, Spain government made a plan design called 'D.O.' (*Denominacion de Origen*) for transporting the products from Iberian pig, which have been distributed in the local areas. It encouraged the shifting of feeding management of pigs and producing of products from private or individual farms to the middle or large-scale enterprises. On the other hand, ecotourism or local museums were developed and they tried to linking with the traditional feeding system of pigs and pig itself. Local community has recognized the pig not as a kind of cultural resource in the local area, which had been their domesticated animal.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗

キーワード：イベリコ豚，地域ブランド，イベリア半島，畜産業，家畜品種，地域文化，*Dehesa*(地中海性森林)，ドングリ

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は本研究計画を実施する以前

には、イノシシを対象とした先住民族の狩猟活動（台湾）ならびに地域社会におけるブタ飼養の動態（台湾ならびに中国福建省）を通じた、人間と動物との関係を、*Sus* 属動物（イノシシ、ブタ）を具体的な対象として行ってきた。そこで、生じた関心は消費経済のグローバル化が世界規模で進む現代社会において、人間が消費する動物資源が、その生態性と象徴性という脈絡において、人間社会の中でどのように位置づけられているかという課題であった。そこで、具体的な事例として、地域で育まれてきた家畜動物がその地域をこえて外部社会に広がっていく際に生じる現象やその際の家畜動物と人間との関係に着目し、日本でも近年、注目を集めているイベリコ豚の地域ブランド化の過程についての調査、研究を起案した。

2. 研究の目的

本研究の目的は地域社会における動物の位置づけを人類学的な立場から考察し、現代社会における人間と動物との関係の新たな展開の様相を明らかにすることである。具体的には、イベリア半島で飼養されている「イベリコ豚」が当該地域で地域ブランドとして確立していった過程について、現地調査を中心とした人類学的な視点をもって分析し、現代社会における人間と動物との新たな関係づくりを、従来、一般的に採用されてきた生態・環境モデルに、社会的・地域文化的要因を連結させて考察するための関係モデルを提示することにある。

3. 研究の方法

初年度は問題点の焦点化をねらいとした国内におけるブタのブランド化の現状について現地調査を行い、次年度からはイベリア半島におけるブタ飼養の状況、食肉生産、加工業、ツーリズム、博物館、関連企業を対象とした聞き取り調査ならびにブタ飼養に関する観察調査を行った。調査にあたっては、現地の学術機関と連携を行い、セビリア大学人類学部、コルドバ大学生産学部等の研究者の協力、連携を得た。

これらに並行して、ブランド化の歴史的背景に関する文献、資料調査を現地の資料館、博物館等で実施した。

4. 研究成果

本研究は研究計画にほぼしたが、年度ごとに成果となる新たな知見を得たことから、計画年度ごとの記述を行うものとする。

【平成20年度】

当該年度は、イベリア半島におけるブタ飼養ならびに他の家畜飼養に関わる文献を渉猟・収集すると同時に、日本国内における地

域ブランド創出の現状を概観するための国内調査ならびに文献調査を行なった。

国内における調査は、鹿児島において実施し、「鹿児島黒豚」としてブランド化されている六白品種の飼育状況、食品産業との関連等について資料を収集した。鹿児島では家畜豚飼養が食品産業の中にくみこまれていることが一つの特徴であり、回収された食物残滓が酵素処理されることによって家畜の飼料にされるという、食品の循環系が成立しており、それがブランドの一つの要素として組み込まれていた。これは近年、意識されている環境への負荷を軽減する「エコロジー」への指向が動物ブランドの肯定的なイメージ作りに使われており、家畜動物の飼育が社会的な価値観とは無関係には行われえないということを具体的にしめすものと言える。すなわち、生態学的な資源の獲得のみならず、社会的にも肯定的な意味を付加することが、ブランドとしての動物種の確立に必要な条件であることが結論として導きだせることになった。

【平成21年度】

当該年度は、イベリコ豚を用いた代表的な加工食品であるハム製造に関わる、企業、品質管理協会、農家、自家加工を行っている食肉販売店での聞き取り調査ならびに参与観察を行った。企業ならびに品質管理協会については、イベリコ豚生ハムの4大産地の一つであるギフエロ地域において、JM社（仮名）ならびに品質管理協会である、G.O.ギフエロにおいて聞き取り調査を行った。これらの調査から明らかとなったのは、品質管理協会による、地域ブランドの産地証明が、大手の企業と中小規模の畜産農家にとっては異なる位置づけになったということである。すなわち、品質管理や商品化について自社で行うことが可能な企業にとって、公的機関である品質管理協会の手続き等は必ずしも、企業の利益や思惑とは一致せず、これらの管理協会からの認定を受けないで、自社ブランドを自力で流通させる試みが行われていた、一方で、競争力が必ずしもついていない、中小規模の企業や農家は、品質管理協会の認定による、品質の保証とそれにもなう価格の引き上げが産業化に重要な機能を有している様相が具体的に明らかとなった。また、イベリコ豚を飼養していない地域では、品質管理協会は設置されておらず、地元の食肉販売小売店が自家加工、製造の生ハムを自家ブランドとして販売しており、地域ごとに特徴のある商品化が行われていたことが明らかとなった。これらの地域では、イベリコ品種の重要性は必ずしも強調されておらず、地域ブランドとしてのイベリコ豚はスペインの地域的な畜産の戦略から作られている可能性が示唆

された。

【平成22年度】

当該年度は、前年度に引き続き、イベリコ豚を用いた代表的な加工食品であるハム製造に関わる、企業、品質管理協会、ブタの放牧農家、地域の博物館関係者に対する聞き取り調査ならびにブタ飼養の観察調査を行った。調査地は前年度のギフェロ地域と比較対象する基礎的なデータを収集することをねらいとし、エストレマドゥーラ地域を中心にした調査を行った。

エストレマドゥーラ地域の子バコ豚のブランド化の過程はギフェロ地域もしくはフェルバ地域におけるものとは異なる要素を有することが現地の調査によって示唆された。すなわち、ギフェロやフェルバでは資本力がある比較的大きなハム製造業者の企業化が一部で進んだ結果、品質管理協会の認定を受けない自社ブランドの製品を流通させているケースが見られたのに対し、エストレマドゥーラは基本的に品質管理協会と製造業者との関係が保たれた製品生産ならびに販売が行われていた。これは、製品の流通という観点から考えた場合には必ずしもエストレマドゥーラ地域の産出する製品が国内ならびに国外における競争力を十分には持ちえていないことにもつながっている可能性がある。すなわち、大企業化した場合には独自の集約的な経営戦略等を採用した展開が可能となるのに対して、中小企業が連携したかたちにおいては各企業のバランスがとられる必要もあり、製品の流通も周辺地域の地縁関係が委ねられる場合も少なくない。一方で、当該地域は Dehesa とよばれる地中海性森林を活用したエコツーリズムとイベリコ豚とを組み込んだ観光開発が模索されているのも新たに得られた知見であった。地域ごとに博物館施設が建設されており、観光誘致の要素とすると同時に、伝統的なブタ飼養の資料等の保存が試みられていた。

【平成23年度】

当該年度は、前年度調査を実施したエストレマドゥーラ地域の継続的な調査を行った。具体的には地域住民の子バコ豚飼養に関する意識調査に加え、家畜飼養の拠点となっている Dehesa (地中海性森林帯) の土地利用ならびにそれに伴う物質文化の形成過程に関わる調査を前年度に継続して行った。イベリコ豚の生産農家ならびに地域型の食肉加工従事者を対象とした聞き取り調査を行った結果、原産地証明 (D.O.) がイベリコ豚に関する産地証明を行った結果、ブタの飼養サイクルや飼養方法が異なることが明らかとなった。すなわち、かつては2年以上の飼養期間をおき、秋から冬にかけてのドングリ飼

養 (Montanera) が2回行われていたのが、現在は規定により1歳獣までの個体でなければ、条件にあわなくなる恐れがあり、早期の出荷に切り替えられるというかたちに変わっていた。また、イベリコ豚の純度、給餌と成長の条件、飼養場所の状態といった諸条件による細分化が進んでおり、副業的にブタを飼養するかたちでは採算がとれにくくなることから、規模を比較的大きく維持できる者がブタ飼養を維持できるような状況であることも明らかとなった。また、ヨーロッパにおける経済危機の影響から、生殖メスを廃畜にするケースも増えており、グローバル市場の中で家畜動物のブランド化が抱える問題点も明らかとなった。これらのブタ飼養の現在の状況に加えて、歴史的な背景を明らかにする調査も継続的に実施した。産地証明制度による経済市場重視の以前の状況について、とくに現在ではほとんど見られないブタの預かり飼養の専業従事者 (concejil) の経験者を対象とした聞き取り調査を行った。これはこれまでも報告例の少ないもので、貴重な歴史民俗資料が得られた。

【得られた成果の国内外の位置づけ】

本計画研究において得られた諸成果は、これまでに本邦における人類学ならびに関連処分野ではほとんど扱われてこなかった内容のものが多い。一方で、本邦においても豚をはじめとする家畜動物からえられる生産物のブランド化は進められている現状がある。とりわけ、将来的に少なからず導入される可能性が高い TPP のようなグローバル経済状況の中で、地域社会における生産資源をどのように展開していくかについて考えるうえで、本研究で示すところとなった諸事例は具体的なモデルケースとして有効に活用されることが期待できる。これらの知見をもとに他の地域における生物生産資源がどのように活用されてきたかという論考をまとめる結果に至った。また、本研究は国内における海外生産物の受容の形態が、輸出元の生産戦略とは異なる思惑で形成されていることも部分的に示している。これらの知見はスペイン側の研究者からも関心をもたれており、地域ブランドの展開が発信元と発信先の双方における状況からより克明に読み取れることから、将来的には国際共同研究のありかたも可能性として含めることとなった。

【今後の展望】

本計画研究においては、主として、イベリア豚が地域ブランド化されていく過程についての調査を行った。その中で明らかとなったのは、地域社会の人々の自然環境の利用形態が、ブタ飼養だけではなく、他の家畜動物の飼養や他の生業とも関連しあっており、その

中にブタ飼養も組み込まれていくということであった。他の生業活動との関係の中での家畜飼養のありかたについてはさらに検証が必要となる。また、エコツーリズムや地域博物館の導入が、基盤産業である家畜飼養にどのような影響を与えるかについても、詳細に検証していく課題として重要であると考えられる。今後はこうした発展的課題にむけた研究計画の立案を企図するものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 野林厚志 「地域社会の歴史と文化を育むブタ飼養：中国福建省客家の「菜猪」とイベリア半島におけるイベリコ豚を事例として」

All about Swine 査読無 40巻 2012, 17-22

- ② 野林厚志 「ブタ飼育における個体管理－台湾ヤミが行なうブタの舎飼いと放し飼いの比較」『ドメスティケーション－その民族生物学的研究』(国立民族学博物館調査報告 84) 2009, 289-305, 査読有

[学会発表等] (計4件)

- ① 野林厚志 「民族誌事例から見たブタの放牧飼育の条件と物質的記録の可能性」第15回動物考古学研究集会 2011, 11, 26 国立奈良文化財研究所

- ② 野林厚志 「地域社会の歴史と文化を育むブタ飼養：中国福建省とイベリア半島を中心に」第21回日本SPF豚研究会 2011, 6, 28 学士会館

- ③ Atsushi Nobayashi ‘The current situation of Iberian pig and its ham in Japan.’

“La Junta de un cocedero de altramuces.”
La casa de la cultura de Monesterio,
Monesterio, 2010.11.12

- ④ 野林厚志 「ブタの弁明－弥生ブタからイベリコブタまで」国立民族学博物館公開講演会『人・家畜・感染症－グローバル化時代の関係をさぐる』2009.10.9 東京日経ホール

[図書] (計2件)

- ① 野林厚志 昭和堂『グローバリゼーションと〈生きる世界〉－生業からみた人類学的現在』(松井健、名和克郎、野林厚志

編) 2011, 167 - 207

- ② 野林厚志 岩波書店『動物観と表象(ヒトと動物の関係学)』(奥野卓司・秋篠宮文仁編) 2009, 92-114

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野林 厚志 (NOBAYASHI, ATSUSHI)

国立民族学博物館・研究戦略センター・教授
研究者番号：10290925